

看護職部門

伝わる瞬間

ささき あつこ
【埼玉県・佐々木敦子】

看護職部門
最優秀賞

私は結婚を機に、一時看護から離れ、海外で出産、子育てをしました。子連れで帰国し成田に着いてほっとした時、抱っこしていた息子が私の髪の毛をひっぱり、髪飾りが目の前にぶら下がってきました。そのとき、看護師になって一年目のあの出来事を思い出しました。

今から20数年前、神経内科病棟で担当したALS(筋萎縮性側索硬化症)のAさんは、話すことも動くこともできません。朝のケアを始めた時、わずかに残されたまぶたと頬の動きで私に「何か」を伝えようとしています。隣にいた奥さまも文字盤で私との「通訳」を試みます。「み」「ぎ」「へ」「や」? 何のことかわからず、「右?」「部屋?」「自分の右?」「向かって右?」奥さまもいつもとは違う内容にいら立ち「もうわかんないっ!」

いつも穏やかで、根気よく何事も教えてくださるAさんは「もういい!」。奥さまも「やっぱりはっきり言ってよ! わからないと気持ち悪い!」。ついに文字盤を挟んで夫婦げんかとなり、いつもは紳士のAさんも穏やかな笑顔が消え、イライラの怒り顔に。最後は涙まで流れてきました。

私のせいで…。私に伝えたいことがあるのに…。

その時です。目の前にビョ〜ンとヘアピンがぶら下がってきました。

「もしかして、ナースキャップの右のヘアピンが落ちそうだって教えてくれていたのですか?」

Aさんは大きくまばたき

「うん!」

この瞬間、みんな大爆笑。私もAさんもくしゃくしゃの顔で一緒に泣き笑いでした。「伝えたいことが伝わらない」って、こんなに苦しくて悔しくて悲しいんだ。「伝えたいことが伝わる」って、こんなにうれしくて、大事なことなんだと心から感じた瞬間でした。

海外に行き、言葉が通じない経験をして、あらためてそのつらさを実感しました。病気や障害によって、意志を伝えることが難しい患者さんが多くいらっしゃいます。私はそのつらさ、苦しさを忘れず、そして伝えること、伝わることの喜びを大切にして、今日も看護師を続けています。